

公開日: 2013/11/28 (掲載号: No.46)

## 小説 『法人課税第三部門にて。』 【第21話】「退職した税務職員の再任用制度」

筆者: ハッ尾 順一

カテゴリ: 税務・会計 税務 解説 国税通則 解説一覧

### 小説 『法人課税第三部門にて。』

#### 【第21話】

#### 「退職した税務職員の再任用制度」



公認会計士・税理士 ハッ尾 順一

「そうか・・・蔵本さんも今年が定年で、退職されたのか・・・」

淵崎統括官が椅子にもたれながら、「定期人事異動速報」を見ている。

蔵本は統括官で、この7月の人事異動で退職している。

職員は皆昼食に出ているので、法人課税第三部門は淵崎統括官以外、誰もいない。

「最近退職して税理士になったとしても仕事がないって聞くし、蔵本さん、どうするのかな？」

湊崎統括官がつぶやく。

「統括官は食事終わりました？」

いつの間にか田村上席が、湊崎統括官の机の傍らに立っている。

食事の後らしく、爪楊枝をくわえている。

「いや、まだだが・・・ところで君は、蔵本さんを知っているよね」

「くらもと・・・？」

田村上席は、口から爪楊枝を外し、ゴミ箱にポイと捨てる。

「確か蔵本さんは、君の前任署の上司じゃなかったか？」

「ああ・・・蔵本統括官ですか」

田村上席は懐かしそうに蔵本の名を口にした。

「その蔵本統括官が、どうかしたのですか？」

湊崎統括官は、読んでいた「定期人事異動速報」を開いたまま田村上席に見せた。

開かれたページには130人以上の課長・統括官級の退職者の氏名が掲載されており、その中にある「蔵本明」という氏名に赤いチェックが付けられている。

「ああ、退職されたんですか・・・僕はずいぶんいろいろなことを蔵本統括官に教わったんですが・・・」

田村上席は残念そうに、その名前を見つめる。

「でも、退職したら税理士になるんでしょうね」

田村上席は、湊崎統括官に問いかける。

「いや、わからない・・・」

湊崎統括官は、頸を傾げる。

「どうしてですか。蔵本統括官はもちろん税理士の資格も既に持っているでしょうし、税務職員は、退職したら税理士になるものだと思っていましたけど」

田村上席は、刈崎統括官を責めるような口調で言う。

「しかし、税理士業界も不況業種だから・・・税理士になったからといって、すぐに食べていけるというものでもないだろう」

今度は田村上席が頸を傾げる。

「それじゃあ、あの・・・再任用制度を希望する、ということですか？」

田村上席がボツリと言う。

「・・・それも選択肢の1つかもな」

刈崎統括官は頷く。

「週4日勤務して給与は月額30万円ぐらいもらえるらしいし・・・もっとも賞与はもらえないから年収として360万円ほどになる。・・・しかし、これぐらいもらえるなら、仕事の少ない税理士をやるより良いとも思うが・・・」

刈崎統括官は椅子の背にもたれて天井を見上げる。

「・・・ということは、刈崎統括官は退職したら、再任用を希望するのですか？」

田村上席は、目を大きくして尋ねる。

「・・・まあ、まだ決めてはいないが、再任用も悪くはない・・・」

刈崎統括官は、自嘲気味に言う。

「そうなんですか・・・ところで・・・統括官は・・・あと何年で・・・退職ですか？」

田村上席は、おそろおそろ尋ねる。

「あと、3年だな・・・まあ3年なんて、あっという間だよ」

田村上席は、薄くなっている瀧崎統括官の頭髮を見る。

「しかし、もし、僕が再任用されて、その配属先の上司が田村君だったら、その時はよろしく頼むよ」

瀧崎統括官は笑いながら言う。

「・・・そんな、ご冗談を・・・」

田村上席は、頭を掻きながら顔を赤くする。

「・・・いや、冗談じゃないさ。僕が退職して再任用されると、もちろん・・・統括官ではなく、一般の調査官になるし・・・」

瀧崎統括官は笑いながら話を続ける。

「・・・何年か前に税理士から聞いた話だが・・・税務署から税務調査の連絡を受けた税理士が、その担当者の名前を「税務職員録」で調べると、「調査官」となっていた。だから、その税理士は、「30歳過ぎぐらいの若い職員が税務調査に来ますよ」と納税者に伝えていたところ、当日税務調査に来た職員はずいぶん老けていて、大変驚いた、と・・・」

田村上席も苦笑いする。

「田村君は、僕が退職する頃には統括官になっているだろうから・・・僕が部下になる可能性は十分にありうる。でも・・・できれば税務調査ではなくて、内勤をしたいがね」

「税務調査は嫌ですか？」

「うーん・・・やっぱり税務調査は精神的に疲れるから・・・定年で一旦退職すると、むしろ申告書の受付のような、あまり気をつかわない内勤がいいよ」

瀧崎統括官は笑いながら言う。

「そうですか・・・でも、統括官のように、税務調査に関する豊富な知識と経験を使わないなんて・・・少し、もったいない感じがしますね」

田村上席は、真剣な顔で言う。

「そんなことはないさ。しかし、僕も年をとったせいもあるのだろうけど、確かに今の若い職員を見ていると、覇気がないように見える」

瀧崎統括官の力のこもった言葉に、田村上席は大きく頷く。

「確かにそうですね・・・税務調査も、もちろん昔のように無茶な税務調査はできなくなって、これからは情報収集を中心としたスマートな調査手法を開発していかなければならないのだけれど、でも、結局は人間が行うことですから、仕事に対する情熱・・・そう、やる気はやっぱり大切ですよね」

田村上席は付け加える。

「・・・老兵は去るべきなんだろうけど、まだ僕なんか、若い税務職員に、自分の知識や経験などを伝えたいと思っているから、再任用されて、時間があれば、そんなこともやってみたい気持ちはある・・・」

「それは良いことですね・・・私が統括官になったら、ぜひ、瀧崎統括官、いや、瀧崎調査官を私の法人課税部門でスカウトしますよ」

田村上席がそう言うと、2人はお互いに顔を見合わせて、大きく笑った。

(つづく)

この物語はフィクションであり、登場する人物や団体等は、実在のものとは一切関係ありません。

小説『法人課税第三部門にて。』は、隔週の掲載となります。

## 連載目次

「小説 『法人課税第三部門にて。』」(全23回)